

# シャルル・ノディエ

## 『フランシスクス・コロナ』、狂人が語る美学

### ——作家の最期の試み——

西 村 美 咲

#### はじめに

シャルル・ノディエ (1780-1844) の『フランシスクス・コロナ』(1843)<sup>(1)</sup> は、作家の「遺作」として重要である<sup>(2)</sup>。しかし、その研究は一般的な言及がなされるばかりで、未だ十全な考察が行われていない。作品を読み解く手がかりとして、近年のノディエ研究の基本とも言えるロズリーヌ・ド・ヴィルヌーヴの指摘があり、ノディエの作品全般と同様、本作においても主人公の「狂気」が主題だと述べられている<sup>(3)</sup>。一方、ジャン・ララが言及するように、主人公の「理性」的な側面が作品の特徴であるとも考えられてきた<sup>(4)</sup>。一見対立するかに見える狂気と理性は、どのように扱われているのだろうか。本稿では、こうした主人公の二重性に着目しながら物語を考察する。

本作は三部構成であり、枠物語構造が使用されている。第一部は、ドミニコ会修道士が執筆した15世紀の実在の希書『ヒュプネロトマキア・ポリフィリ』<sup>(5)</sup>（以下、『ヒュプネロトマキア』）をめぐる物語である。語り手と愛書家ロヴリックが、この希書を求めて書店を訪れるという展開で、ここでの物語はほとんど『ヒュプネロトマキア』の概説と言える。第二部は、ロヴリックが店主の頼みで執筆する、「フランチェスコ・コロナ、書誌学的な物語」と題された作中作の物語である。これは、『ヒュプネロトマキア』の著者である修道士フランチェスコと、彼の愛するポーリアとの恋の物語である。舞台は、15世紀のイタリア。フランチェスコは貴族の家系に生まれたが、出生と同時に両

親を亡くし、画家の養子となった。彼は芸術家が集うピサーニ宮で出会った貴族のポーリアに恋をするが、彼女との恋が成就しないことに苦しんでいた。しかし、ゴンドラでの遊覧の会が開かれた夜、二人は同じゴンドラに乗り、互いに愛し合っていることを知る。しかし、フランチェスコは「普通の婚姻」<sup>(6)</sup>を望まず、ポーリアと結ばれることを拒む。その後、修道士となったフランチェスコは、ポーリアに変わらぬ愛を告げるため、彼女に捧げる『ヒュブネロトマキア』を執筆し始める。約一年かけて書き上げたとき、彼はポーリアが貴族と婚約したという噂を耳にして絶望する。やつれ果てた彼は、噂の真偽を確かめべくポーリアの元を訪れる。彼女は、甘美な言葉で噂を否定してフランチェスコを安心させるが、彼はその幸福さえ自分を苦しめていることに気が付く。そして翌日、いつもの勤めを終えたフランチェスコは、祈りの姿勢のまま息を引き取っていた。第三部では、再び書店の場面に戻る。ロヴリックは店主から『ヒュブネロトマキア』を受け取り、それを語り手に譲って物語は幕を閉じる。

本稿で扱うのは、第二部、フランチェスコとポーリアの愛の物語である。フランチェスコが、ポーリアと結ばれることを拒否しながら理想の愛を語る姿をめぐって、彼の狂気と理性を考察する。これに際して、晩年の思想と重ねながら、ノディエが最後の作品『フランシスクス・コロナ』によって行った試みを考察する。

## 1. フランチェスコの狂気

### 1-1. 古代崇拜

はじめに、フランチェスコの狂気的な側面に着目しよう。ヴィルヌーヴが彼の狂気を指摘したことは前述したが、そのとき「狂人 (fou)」という言葉が使用されている。しかし、作中ではフランチェスコは「狂人」だとは書かれていない。では、彼の狂気はどのように表れているのだろうか。この問題を考えるにあたって、評論「狂人の書誌目録」(1835)に目を向けたい。ここで、ノディエは『ヒュブネロトマキア』の著者フランチェスコ・コロナに言及して

いる。(以下、『フランシスクス・コロンナ』の主人公フランチェスコとの混乱を避けるため、『ヒュプネロトマキア』の実在の著者をコロンナと記す。) 同評論は、ノディエの愛書家としての一面をうかがわせるもので、彼が称賛する作品が紹介されている。注目すべきは、コロンナが「最も偉大な狂人(fou)のうちの一人」として名を挙げられていることである<sup>(7)</sup>。ノディエは、「二つの情熱」がコロンナの狂気の原因だと考えていた。一つは「古代(antiquité)」であり、もう一つは「愛(amour)」である<sup>(8)</sup>。こうした指摘は、ギリシャ・ローマ趣味を盛り込みながら、主人公が愛する女性と結ばれることを求めて夢の中で旅をするという、『ヒュプネロトマキア』の特徴が念頭ににあると思われる。重要なのは、作品の特徴であるこの二つの要素、古代と愛が、コロンナの狂気の原因と述べられていることである。つまり、ノディエは、作品に描かれているこの二つのテーマに、コロンナの狂気が最もよく表れていると考えていたのだ。

こうした評論を踏まえると、フランチェスコの狂気は、古代と愛という言葉に関連していると考えられまいだろうか。こうした観点から、まず古代を切り口に彼の狂気を考察しよう。

フランチェスコの古代への強い関心を表すものとして、以下の描写がある。

(...) Francesco n'appartenait plus que sous le rapport de la foi à ce monde des modernes que le christianisme avait renouvelé ; l'antiquité avait d'ailleurs toute son admiration et tout son culte, et une étrange alliance s'était opérée dans son esprit entre les croyances de l'homme religieux et l'esthétique du païen.<sup>(9)</sup>

フランチェスコは、信念あるいは教理の上でしかキリスト教と関係していなかった。彼が真に賞賛し、崇拝しているのは「古代(antiquité)」である。コロンナの特徴として挙げられた古代への情熱は、フランチェスコでは古代崇拝として色濃く表現されている。ここで注目すべきは、フランチェスコの精神には、キリスト教と古代崇拝という異教信仰の二つの信仰が「奇妙に結合」していることである。つまり、彼の内には聖職者としての「信仰」と、異教の「美学(l'esthétique)」が共存しているのである。彼はのちに修道士として神に一

生を捧げる身であることから、敬虔なキリスト教徒でなくてはならない。それにも関わらず、心では古代を崇拝していることに、彼の奇異的な精神性が顕著に示されている。こうしたフランチェスコの特質は、不思議な形で生活に表れていた。彼は、古代の言語を混合させた「私的言語 (dialecte intime)」を創り出したのである。こうした言語の創作の背景には、15世紀のイタリア語は情報の伝達には適しているが、意思や感情を表現する文学的な言語としては相応しくないという考えがあった<sup>(10)</sup>。つまり、フランチェスコは古代言語を混合させて創り出した自身の言葉こそ、詩作に相応しいと考えていたのだ。事実、『ヒュプネロトマキア』は「通俗の言葉を捨てた私的な言語」で執筆された<sup>(11)</sup>。こうしたフランチェスコの言語の特異性は、実在の『ヒュプネロトマキア』に基づいている。19世紀の『世界人名辞典』の説明によると、イタリア語で執筆された同作には、「ギリシャ語、ラテン語、ヘブライ語」など古代の言語が混在していた<sup>(12)</sup>。つまりノディエは、コロンナに見られる言語の特徴を、フランチェスコにおける古代崇拝の顕現としたのである。そして、こうした古代の信仰からくる私的な言語の創造が、フランチェスコを世間から孤立させていた。

Il résulte de là [son culte de l'antiquité] qu'il s'était composé pour son usage une sorte de dialecte intime (. . .). Ce tour singulier d'esprit, qui était alors le propre d'une organisation originale (. . .) avait isolé Francesco du reste du monde. Il y passait généralement pour un visionnaire mélancolique en proie aux illusions de son génie, et insensible aux douceurs de la vie commune.<sup>(13)</sup>

彼は、自身の特質が生み出す幻影に取り憑かれた「メランコリックな幻視者」であり、「一般的な生活で感じられる喜びに無関心」な人物だと見なされていた。つまり、世間の人々は、彼を社会に適応していない異常な人間と見なしていたのである。このように、彼は過剰な古代崇拝によって、異常な幻視者つまり狂人と捉えられ、世間から孤立していた。

## 1-2. ポーリアへの愛

次に、コロンナの狂気として挙げられたもう一方の情熱、「愛」に着目しよう。「彼の精神を狂わせるのにとどめを刺した」のは愛の情熱だと述べていることから、ノディエは、コロンナを狂気に至らせた一番の要因は古代よりも愛にあると考えていたことが分かる<sup>(14)</sup>。こうした観点からフランチェスコを見てみよう。この際、彼がポーリアに自身の精神状態を明かした言葉が重要になる。

Mais comment oserai-je vous [Polia] révéler ces secrets tristes et profonds des cœurs malades que la philosophie et la sagesse regardent comme une infirmité puérile de l'esprit (...).<sup>(15)</sup>

ここでフランチェスコは、自分を哲学など理性的な世間一般の認識と対置している。世間の人々の目には、彼は「子供じみた精神の欠陥」<sup>(16)</sup>として映っていたという。しかし、常軌を逸した印象を与える彼の様相とは、世間が思うような「精神 (l'esprit) の欠陥」ではなく、「心 (cœur) を煩った」状態なのである。その病の原因とは、彼が抱える「悲しく深遠な秘密」にあるという。このように、フランチェスコは、普通の人間に備わっているはずの精神を欠いた、精神異常の狂気ではなかった。その内実は、悲しい秘密を抱えて病んでいる陰鬱な状態なのだと主張されている。事実、彼はこのような心の病を、「生まれながらのメランコリー」<sup>(17)</sup>という気質に起因するものと考えている。そして、彼を苦しめる秘密とは、ポーリアへの秘めた愛だと言える。なぜなら、ポーリアと出会ってからの彼は、「いつもに増して夢想に取り憑かれ、悲しげな様子」<sup>(18)</sup>をしていたからである。つまり、彼女に対する愛によって、フランチェスコの憂鬱な性質が一層深まり、その様子が世間の目には「狂気」として映っていたのである。

このように、ノディエは『ヒュプネロトマキア』の主題とも言える古代と愛に着眼し、それらを通してフランチェスコの狂気を表現していた。ただし、彼の狂気は、精神に異常を来した状態ではない。彼は、私的な言語を創ったことで世間から孤立した幻視者と考えられていたが、その背景には古代信仰があっ

た。さらに、精神異常のように見なされていた彼の陰鬱な様子は、ポーリアへの愛を心に秘めて苦悩するメランコリーが原因であった。以上のように、フランチェスコの狂気とは、修道士でありながらキリスト教とは異なるものを崇敬する奇妙な精神の状態であり、叶わぬ愛に苦しみ心を病んでいる状態として表現されていた。

ここで、彼の心を蝕む最大の原因、ポーリアへの愛に注目する。ミシェル・ブリックスの指摘によると、フランチェスコがポーリアと結ばれない理由は、彼女の地位があまりに高いことにあるという<sup>(19)</sup>。しかし、フランチェスコの言葉を追っていくと、彼が婚姻を拒否した理由は、ポーリアの身分や地位など社会的な要素だけではないと分かる。以下では、フランチェスコがポーリアと結ばれることを拒んだ理由を再考しながら、彼が真に求める愛について考察する。

## 2. フランチェスコが語る哲学的な思想、天上での愛

フランチェスコは、身分の低い自分に与えられるものは、ポーリアの愛ではなく彼女の「哀れみ」<sup>(20)</sup>だと考えていた。こうしたフランチェスコの悲観的な判断は、彼女の高貴さに値しないという考えからくるものだが、その高貴さとは社会的な地位のことだけではなかった。

J'aimais une femme que l'on désignerait à tout le monde en peignant les rares qualités dont elle est revêtue, qui joint à la beauté toutes les perfections de l'intelligence et de l'âme, et que le ciel semble n'avoir confiée à la terre que pour nous rappeler l'inexprimable félicité de la condition que nous avons perdue.<sup>(21)</sup>

フランチェスコは、ポーリアが「稀な性質 (qualité)」だと考えていた。その性質とは、「知性 (intelligence)」や「魂 (âme)」が完璧で、それらが彼女の美と結びついているというものである。彼は、彼女のこうした性質は、ある使命のために天から与えられたものだと考えていた。その使命とは、地上で生きる人間がかつて味わっていた、「失った場所でのえも言われぬ至福」を喚起さ

せることである。フランチェスコは、彼女の美に触れ、地上よりも幸福な場所があると悟ったのだ。このように、フランチェスコはポーリアの地位だけではなく、魂にまで関わる性質に特別な崇高さを感じていた。さらに、彼は彼女を天上からの使者のように尊んでいたのである<sup>(22)</sup>。フランチェスコは、これほど崇高な彼女を愛するためには、自身の魂を「彼女の魂に相応しい段階にまで到達させなければならない」<sup>(23)</sup>と確信していた。さらに、ポーリアに対して「あなたの高みにまで昇るには、絶え間ない諦観しかない」<sup>(24)</sup>と述べる。つまり、フランチェスコは、ポーリアの魂の高みに近づく唯一の方法は、愛を成就させることを諦めることだと考えたのである。「絶え間ない (constante)」という表現から、ポーリアと結ばれることを求める不可避的な情熱に対して、それを常に拒もうとする彼の堅い決意がうかがえる。こうした決心は、恋の成就という幸福を諦めるという点で悲観的なものを感じられる。しかし、フランチェスコは絶望してはいなかった。それは以下のような理由からである。

Je me condamnerai douloureusement à vivre sans espérance, mais sans crainte, pour atteindre à ce moment où deux âmes, affranchies de tous les liens qui ont pesé sur elles, se cherchent, se reconnaissent et s'unissent pour toujours.<sup>(25)</sup>

彼は、自身に「希望なく生きる」ことを課した。「希望なく生きる」とは、前述した「絶え間ない諦観」とともに生きること、すなわちポーリアとの恋を諦めて生きることである。絶望的に思えるこの生き方だが、「不安」は一切ないという。なぜなら、魂が鎖から解放されたとき、ポーリアと永遠に結ばれるという報いが与えられるからである。「鎖 (lien)」とは魂を地上に繋ぎ止めるものであり、その鎖から解放される瞬間とはつまり、死を迎えた時だと考えられる。そして、死後到達した天上で、フランチェスコとポーリアの魂は永遠に結ばれるのである。このように、地上でのポーリアとの婚姻を諦めることで、フランチェスコは彼女の魂の高みにまで近づき、そして天上で彼女と永遠に結ばれるのである。すなわち、地上でこうした諦めを甘受することは、天上で結ばれるための試練だと言える。以下の言葉から、フランチェスコがそれを明瞭に意識していたことが分かる。

Cette terre n'est qu'un lieu de passage où les âmes viennent s'éprouver ; et si votre âme, aussi fidèle qu'elle est dévouée, reste mariée à la mienne pendant les années que le temps nous mesure encore, l'éternité tout entière est à nous !

... (26)

彼は、地上を「通過の場」と考えていた。そこは魂が試練を受けるために、一時的に降下してきた場所に過ぎない。したがって、彼が恋を成就させることを諦めたのは、それが天上で結ばれるための精神的な試練だと自覚していたからである。また、彼にとって、地上は時間に支配される束の間の場でしかない。地上での生は、死によって魂が解放されることを待つ忍耐の時間でしかなかった。つまり、地上で結ばれることは彼にとって理想ではない。真に理想的な婚姻は、地上から解放され、魂となって飛翔した天上で行われる。なぜなら、天上では、束の間の世界とは異なり、「永遠 (l'éternité)」が与えられるためである。このように、愛する二人が地上で行うべきことは、束の間の婚姻ではなく、天上での永遠の愛を求めることを誓う、「心の婚姻」を交わすことなのである。

以上のように、フランチェスコは、ポーリアとの身分の違いが原因で婚姻を諦めたのではなかった。彼がポーリアと結ばれることを諦めたのは、それが彼女の魂の崇高さに近づくための試練だと考えていたからである。そして、フランチェスコは、普通の婚姻よりも望ましい天上での婚姻を夢見ながら、地上で試練に苦しんでいた。このように、試練を甘受して苦悩する彼の姿が、世間の人々の目には「狂気」として映っていたのである。ヴィルヌーヴは、ノディエの作品全般の狂人について、「魂が理想の領域に向かっている」<sup>(27)</sup>人物、つまり理想を希求している存在だと述べている。狂人フランチェスコにおいては、その理想とは天上で愛するポーリアの魂と結ばれること、すなわち「天上の愛」<sup>(28)</sup>なのである。以上のように、狂人フランチェスコは精神異常などではなく、プラトニズムに基づく理想主義的な愛の美学を語る人物なのである。



### 3. ノディエの晩年の試み、 フランチェスコによる新たな信仰の提示

#### 3-1. 晩年の思想、非キリスト教と新たな宗教

フランチェスコの求める愛が哲学的な思想だということは、晩年のノディエの論考からも裏付けられる。ノディエの晩年の思想を代表する「人類の輪廻と復活について」(1832)を見てみよう<sup>(29)</sup>。同論考では、創世の過程が細かに述べられており、その過程と題目である輪廻の繋がりが論考されている。ここで注目すべきは、ノディエは独自の観点で「創世記の造り直し」<sup>(30)</sup>を行っているということである。彼は、人類に至る世界の創造は6日間ではなく、5日間で行われたと主張する。この5日間の創世記では、3日目に無機物が現れ、4日目に植物と動物、5日目に人類が誕生する。こうした各日での生命の進化は、「新たな変化への渴望」<sup>(31)</sup>によって成し遂げられている。しかし、創造の終わりには人類ではなかった。5日目はまだ未完成で、過程の段階だという。なぜなら、人類は植物や動物など他の生命がこれまで成し遂げてきたような「本能が望んでいる進化は未だ成し遂げられていない」<sup>(32)</sup>からである。それゆえ、人類は後に現れるより優れたものに変化することを常に望んでいる。その優れた存在とは、人間には分かり得ない真実を掴んでいる「包括的な存在 (l'être compréhensif)」<sup>(33)</sup>である。そして、人間と「包括的な存在との隔たりはほとんど何もなく、あるのは死のみだ」<sup>(34)</sup>と述べられている。すなわち、人間が次の段階、包括的な存在に到達するには、「死が必要」<sup>(35)</sup>なのである。

このように、ノディエの思想には、生物の進化に顕著のように「より優れた段階へ到達することの渴望」という、理想的な領域への「上昇」<sup>(36)</sup>志向が根底にあった。そして彼は、こうした理想への傾倒に基づきながら、「死」によって理想に到達するという独自の価値観を創り出していた。愛する魂と結ばれるのが、死によって魂が解放されたときというフランチェスコの天上の愛は、「人類の輪廻」の価値観が背景となっていると言えるだろう。すなわち、フラ

ンチェスコの愛の美学は、ノディエの哲学的な思想に基づいているのだ。事実、ノディエは「人類の輪廻」で論じた内容を、「私の哲学 (ma philosophie)」と述べている<sup>(37)</sup>。したがって、フランチェスコの愛の美学は、愛を主題にしたノディエの「哲学」と考えられるだろう。重要視すべきことは、『創世記』を題材にしてキリスト教の教理を扱うように見せながら、実際には、ノディエが彼自身の哲学を語っているということである。こうした試みの意図は、前年の1831年に執筆された論考、「愛について」に垣間見える。そこでノディエは、『『神は死んだ』という叫び声を聞いた』と述べて、キリスト教ではない新たな価値体系を示すことの必要性を主張している<sup>(38)</sup>。このような新たな価値観を追求する意識のもとで、翌年に「人類の輪廻」が執筆されたのではないか。つまり、ノディエは同論考で、キリスト教を模しながら、それに代わるものとして独自の信仰を提示したと考えられる。

### 3-2. 修道士による独自の宗教の創造、「天上の愛」

このようなノディエの晩年の試みを手がかりに、ゴンドラでのフランチェスコの言葉をもう一度見てみよう。彼は、天上でポーリアと永遠に結ばれるために、地上で恋を成就させることを諦める覚悟を明かしたのち、以下のように述べる。

Je fis de celle [l'âme] que j'aime un objet de culte pour ma vie entière ; je lui élevai un autel inviolable dans mon cœur, et je m'y dévouai moi-même comme un immortel sacrifice.<sup>(39)</sup>

彼は、ポーリアの魂を「崇拜 (culte)」の対象にしており、その信仰を不可侵のものにするため、心に「祭壇 (autel)」をしつらえていた。「崇拜」「祭壇」からもうかがえるように、彼はポーリアの魂に対する情熱を、宗教に匹敵させている。彼はポーリアと天上で結ばれることを生涯の理想にしていたが、これはつまりポーリアの魂を本尊とした独自の宗教を揺るぎなく信仰することなのである。注目すべきは、フランチェスコが三日後に修道院に入る際、神に捧げるつもりになっている誓いである。彼は、キリスト教の信仰を誓うべき神に対し

て、独自の宗教に基づく誓いを立てようと考えていた。

Le serment qui me dévoue à lui [Dieu] dans trois jours, c'est le serment qui m'unit indissolublement à celle [l'âme] que j'aime et qui ne me donnera de droits sur elle que dans le ciel.<sup>(40)</sup>

彼が神に誓うのは、彼の魂とポーリアの魂を「別れがたく（indissolublement）」結んでくれる誓いであり、その権利を「天上」でのみ与えてくれる誓いである。「別れがたく」さらには「天上」という言葉から明らかになるように、こうした誓いの背景にあるのは、ポーリアと天上の愛、つまり彼の独自の宗教に対する揺るぎない信仰心である。このように、フランチェスコは修道士でありながら、心ではポーリアの魂を本尊とした天上の愛を信仰していたのである。

以上のように、フランチェスコは反キリスト教とも言えるほど篤い信仰心で、天上の愛を心の宗教とした。これは、キリスト教に代わる新たな価値観を追求しようとした、ノディエの晩年の試みと通底していると考えられる。こうした観点に立つと、一見「狂気」とは相容れない、フランチェスコの理性的側面が理解できる。これまでの研究において、フランチェスコの理性は、「叶わない愛」を描いたノディエの他作品との決定的な違いをもとに指摘されていた。他作品において、主人公が恋を叶えられないのは、愛する者の「死」など超えられない壁に妨げられるからである。これに対して、フランチェスコは、ララが「自らの意思で障害を置いている」<sup>(41)</sup>と指摘しているように、彼自身が愛の成就を拒んでいるのである。ララは、こうした他の作品との差異点、主人公が自ら地上での恋を諦めた姿勢を、「理性」と表現していた<sup>(42)</sup>。しかし、それはただ堅い意思ということではなく、宗教的信仰という確信的な信念であった。すなわち、フランチェスコの「理性」とは、天上の愛を独自の宗教とし、その教えに反する地上での恋の成就を拒んでいる、敬虔な信者の信仰心なのだ。このように、ノディエは修道士というキリスト教徒に、独自の愛の美学を宗教として信仰させた。その背景には、キリスト教とは異なる新たな価値体系を創り出そうとする、作家の晩年の創造的な試みがあったのではないだろ

うか。

このように考えると、フランチェスコの狂気の認識を発展させることが可能である。彼は、狂人として描かれていたが、「狂気」という言葉には結びつかないような、天上の愛という哲学的な思想を持っており、さらにはそれを独自の宗教にしていた。したがって、彼は新たな宗教を創り出した革新的な存在と言えるのである。このように、ノディエは、フランチェスコに対して世間の人々が持つ狂気の認識を覆しながら、彼を哲学的な愛の美学を語る存在とし、キリスト教に代わる宗教の創造者のように描いたのである。

## 結論

本稿では、フランチェスコの狂気と理性の二面性を考察してきた。これまで、フランチェスコは「狂人」と指摘される一方、ポーリアとの愛を堅い意思で諦めたことで「理性」的と考えられてきた。この二つの性質は、一見矛盾するように思われる。しかし、狂気が精神異常ではないという観点に立つと、相反するものではないことが分かる。フランチェスコの狂気とは、ポーリアの魂の高みに近づくため、彼女と地上で結ばれることを諦観するという試練に堪え忍ぶ苦悩であった。こうした試練の甘受の背景にあるのは、魂が解放されたのち、天上でポーリアと永遠に結ばれるというプラトニズムに基づいた理想主義的な愛の美学である。このように、彼が「理性」的に地上での婚姻を拒む態度は、天上での愛に対する揺るぎない信仰心の表れと言える。以上のように、フランチェスコは狂人であったが、決して精神に異常を来している人物ではなく、哲学的な思想を抱く創造的な存在なのである。

そして、晩年のノディエは、キリスト教に代わる信仰を生み出すことが必要だと意識しており、死の数ヶ月前に執筆した最後の小説において、その課題を狂人に託したのである。ノディエは、狂人フランチェスコに自身の哲学に基づく愛の美学を語らせることで、キリスト教に代わる新たな信仰の可能性を示そうとしたのではないか。

注

- (1) Charles Nodier, «Franciscus Columna», *Bulletin de l'Ami des Arts*, t. première année, 20 août et 5 septembre 1843, pp.101-108 et pp.134-147 ; id., *Franciscus Columna* : dernière nouvelle de Charles Nodier, précédée d'une notice par Jules Janin, Paris, J. Techener, 1844. 本稿では、初出の雑誌記事（1843）を使用テキストとし、以下「Franciscus Columna」と記す。
- (2) Charles Nodier, *Contes de Nodier*, éd. Pierre-Georges Castex, Paris, Garnier Frères, 1961, p.846.
- (3) Roselyne de Villeneuve, *La Représentation de L'Espace instable chez Nodier*, Paris, Honoré Champion, 2010, p.759.
- (4) Jean Larat, *La Tradition et l'Exotisme dans l'Œuvre de Charles Nodier (1780-1844)* : *Étude sur les origines du romantisme français*, [1923], Genève, Slatkine Reprints, 1977, p.325.
- (5) *Hyperotomachia Poliphili*. 1499年にヴェネチアで出版された書物で、アルド・マヌーツィオの出版所から刊行された。1546年刊行のジャン・マルタン訳が、最初のフランス語翻訳版である。ノディエは、1499年の初版を所有していた。(Charles Nodier, *Description raisonnée d'une jolie collection de livres*, Paris, J. Techener, 1844, p.489.)
- (6) «Franciscus Columna», p.140.
- (7) Charles Nodier, «Bibliographie des fous : de quelques livres excentriques», *Bulletin du bibliophile*, t.I, n° 21, 1835, p.22.
- (8) *Ibid.*, p.22.
- (9) «Franciscus Columna», p.134.
- (10) *Ibid.*, p.134.
- (11) *Ibid.*, p.144.
- (12) *Biographie universelle ancienne et moderne*, sous la dir. de Louis-Gabriel Michaud, t. IX, 1813, p.520. 18世紀イタリアの文学者ジローラモ・ティラボスキ（1731-1794）の引用と共に、こうした複数の言語からなる奇異的な特徴が強調されている。「Heureux, dit le savant Tiraboschi celui qui parvient, je ne dis pas à l'entendre, mais seulement à savoir en quelle langue il est écrit (. . .)» (*Ibid.*) 『世界人名辞典』は、1810年から1828年に出版され、その後1842年から1865年にかけて改訂版が刊行される。ノディエが改訂版の第一巻（1842）の序文を執筆していることを踏まえると、彼が同辞典の「François Colonna」の項目を目にしていたと考えて良いだろう。「François Colonna」の項目は、初版では9巻（1813年, pp.519-520）、同じ内容のまま改訂版では8巻（1844年, p.656）に納められている。改訂版8巻はノディエの死後に出版されているため、ノディエは、『フランシスクス・コロナ

ナ』を執筆した際、1813年の初版を参照したと考えられる。

- (13) «Franciscus Columna», p.134.
- (14) Charles Nodier, «Bibliographie des fous», *op.cit.*, p.22.
- (15) «Franciscus Columna», p.139.
- (16) 「身体欠陥 (infirmité)」という言葉に着目して、初期作品「一時または幻影 (Une Heure, ou la Vision)」(1806)を参照しよう。同作は、ヴィルヌーヴが『フランシスクス・コロンナ』同様、主人公の狂気が主題になる作品として挙げたものだが、ここで «infirmité» は、世間に «fou» と見なされる人物の特徴を示す言葉として使用されている。このように、「一時」を考慮に入れると、«infirmité» は «fou» を示す言葉だと考えられる。(Charles Nodier, «Une Heure, ou la Vision» dans *Les Tristes, ou Mélanges tirés des tablettes d'un suicide*, Paris, Demonville, 1806, p.72.)
- (17) «Franciscus Columna», p.138.
- (18) *Ibid.*, p.135.
- (19) Michel Brix, *Éros et littérature, le discours amoureux en France au XIXe siècle*, Paris, Peeters, coll. «La République des Lettres», 2001, p.146.
- (20) «Franciscus Columna», p.139.
- (21) *Ibid.*, p.139.
- (22) フランチェスコがポーリアを「天の天使 (Ange du ciel)」と呼ぶことから、彼がポーリアを尊ぶ様子がうかがえる。( *Ibid.*, p.142.)
- (23) *Ibid.*, p.141.
- (24) *Ibid.*, p.142.
- (25) *Ibid.*, p.140.
- (26) *Ibid.*, p.142.
- (27) Roselyne de Villeneuve, *op.cit.*, p.759.
- (28) ノディエの死から約7ヶ月後、ネルヴァルは、『アルティスト』誌に8月11日付けで掲載した記事、「シテール島への旅」において、フランチェスコが求める愛を「天上の愛 (l'amour céleste)」と表現している。(Gérard de Nerval, «Voyage à Cythère, III», *L'Artiste*, 4e série, t. I, 11 août 1844, p.225. Voir aussi Gérard Nerval, *Voyages en Europe*, éd. Michel Brix et Hisashi Mizuno, Paris, Sandre, coll. «DU SANDRE EDITI», 2011, p.252.)
- (29) ポール・ベニシュは、「人類の輪廻」で提示された「復活」の概念を、作家の晩年の思想を象徴するものとしている。(Paul Bénichou, *L'École du Désenchantement*, Paris, Gallimard, 1992, p.85.)
- (30) *Ibid.*, p.82.
- (31) Charles Nodier, «De la Palingénésie humaine et de la Résurrection», *Revue de Paris*, t. XLII, 1832, p.89.

- (32) *Ibid.*, p.90.
- (33) *Ibid.*, p.90. カステックスは「人間よりも優れた存在」と述べている。(Charles Nodier, *Contes de Nodier*, *op.cit.*, p.842.)
- (34) Charles Nodier, «De la Palingénésie humaine et de la Résurrection», *op.cit.*, p.103.
- (35) *Ibid.*, p.89. ベニシュールによると, 死が, 「高次の段階への扉を開く」のである。(Paul Bénichou, *op.cit.*, p.85.)
- (36) ベニシュールは, ノディエが主張する生命の進化論を, 「上昇の図式 (le plan ascensionnel)」と述べている。(Paul Bénichou, *op.cit.*, p.83.)
- (37) Charles Nodier, «De la Palingénésie humaine et de la Résurrection», *op.cit.*, p.107.
- (38) Charles Nodier, «De l'Amour, et de son influence, comme sentiment, sur la société actuelle», *Revue de Paris*, t. XXV, 1831, p.221. また, 「キリスト教は良い面もあった。しかしそれは弱々しいものだった。(中略) 我々はそれよりも先に進んだ。キリスト教が行ったことを, 我々が明確にしたのだ」と述べていることから, キリスト教を発展させようとしたノディエの試みが窺い知れ得る。( *Ibid.*, p.223.)
- (39) «Franciscus Columna», p.140.
- (40) *Ibid.*, p.140.
- (41) Jean Larat, *op.cit.*, p.325.
- (42) *Ibid.*, p.325. 西尾和子氏もまた, フランチェスコ, さらににはポーリアが地上での別れを甘受していることを, 他作品の主人公たちとは異なる点として指摘している。(西尾和子『シャルル・ノディエの文学-想像力の勝利-』駿河台出版社, 2001年, pp.173-174。)

(文学研究科博士課程前期課程)